

告 1 4 3 - 3
(告 1 4 2 - 2 の反訳)

野村:星野リゾートに対してもそう、途中で「止められちゃ困る」からと、そればかり言ってね、断った。それから UT ホールディングスに対してもそう、「途中でやめたら困るから」とやってね、断った。その背景にあるのがね。千代田のときね。「途中で止められちゃったからね、裁判して 4000 万もらうのに大変だった」みたいなこと言っててね、「それがあるからそうなんだ」ということなら僕は何度か聞いている。そこまでね「途中で止められると困る」っていうことをね、さんざんね、表に出してね、星野リゾートと UT ホールディングスは断りながらね、なんで JRT に関してはね、その提案した内容をね、ちゃんとやらなかったときのためのね、方策をね、何ら取らないどころか、買戻しの特約、他の町の財産を売買するときね、買戻特約に入れることがあるのにね、普通だったらね、買戻特約を入れますよ。10 年間でね。「提案内容がね、できなかった場合はね、買戻しをする」と。それも入れない。何で?と星野もね、UT ホールディングスでもね、そこまでね、しつこくね。って言いながらね、なぜ JRT に対して、一切それがなしでね、手放しちゃったのか。不思議でしょうがないよ、僕は。バランスが取れないよ。

山内:いやそれは土地が北海道であったということと、町の利益を考えたときに・・・

野村:いやいや。

山内:僕らの話しをしてるんですよ、あなたの考え(不明)せんから、僕らをそういうふうにして、やったということです。それがおかしかつたら、どこにでも出てって、何かいうふうにして、もっと主張すればいいんじゃないですか。意外にも(不明)ですけども。僕らはそういうふうにして手続きを踏んで、何回も言いますが、手続き踏んで、議会にも説明して、今やっているわけです。議会に対して陳情書を上げましたが、その議会は、さっき言ったように、どう返ってくるか、ちょっともう少ししたら多分返ってくるんじゃないかなと思いますけど、私の中身全部わかりませんが、それによって、あなたも強く私の方に出てくるのか、それとも議会も、そういうふうになんて思っているのか、ちょっと僕は、ちょっとわかりませんが、それ推移をもう少しみてください。

野村:僕言ってるのはね。UT ホールディングス、あそこまで「途中で止められたら困る」ということをね、言ってながらね、バランスが全く取れてないんですよ。JRT。あれは土地の問題じゃなくてね、買戻権の話ですからね、結局ね、あの土地の賃借権ね、とうぜんオーナーはね、オーナーは北海道ですよ、でも賃借権はね、あんた方のものだったわけですよ、賃借権はね、賃借権っ

告143-3
(告142-2の反訳)

てのはね、リフトの所有権に付随してたわけですよ。それを売るにあたってね・・・

山内:その話しは、別のときにしましょう。

野村:なんで?そんなこと納得いかないよ。僕言ってるのはね、あなたがね、いかにもね、口先だけでね、癒着はない、談合はない、みたいなこと言ってるけどもね、そう思わざるを得ない、「おかしいな」ってことにあるから言ってるんですよ。納得いかないよ。

山内:それはあなたが勝手に・・・

野村:いやバランス取れないよ、なんでJRTのときだけはね・・・

山内:それを調べて証拠でも持ってきてください。

野村:証拠なんて取れないよ、密室の犯罪なんてね。

山内:証拠もないのに言うのは失礼じゃないですか。ね。あなたが、町民の権利である、いや義務である、しっかりとした納税もしてないみたいだ、そんなふうにして僕は感じますよ、って言われたら、失礼だと思いませんか?

野村:いま事情があって払ってないですよ。確かに。

山内:いや知りません私。知らないんですけども、自分の勝手な思いで、私に勝手な思いで、そうやってあなたに対して言ったら、ものすごくそれは失礼なことでしょう。私に言ってること。あなたの資料も証拠もないのに、JRTとタッグ組んだとか、JRTと何かしてるとか・・・

野村:言っていないでしょ、そんなことは。

山内:言ってるから、そういうふうにして、何回もこういう請求してるわけでしょ。

野村:違う。僕が言ってるのはね、それがね・・・

山内:いや、言ってる。

野村:違う。言ってるのね、なぜね、なぜ違うんだと・・・

告143-3
(告142-2の反訳)

山内:黒幕がいるまで言ったよな。一番最初に、前回その上の部屋であって、あなたは悪くないかもしれない、黒幕がいるんだって、そういう言い方もしてましたよ。

野村:ね、そこはね、あなたをね、多少おもんぱかってね、僕は言ったつもりだった。後で考え方変えたけどね、あなたをおもぱかって言ったつもりだったけどね、ちょっと考え方を変えましたよ。

山内:黒幕ってどういうことですか、黒幕に使われている僕らは何なんですか。

野村:それは僕はね、撤回しませんでしたか?「確かに言葉に語弊がありました」と。「今の言葉を撤回します」と、正式にね。

山内:思ったから言ったんでしょう。

野村:僕はね、正式に言いませんでした?「撤回します」と。

山内:撤回すれば、じゃあ何言ってもいい・・・

野村:いやでも僕はいいませんでした?「撤回します」と。「言葉がね、不適切でした」と。

山内:あまりにも失礼ですからね。撤回すべきですからね。

野村:だから言いましたよね?「撤回します」と。

山内:言ったと思いますよ。

野村:だからそれをね、撤回したことをね、

山内:(不明)

野村:そんなこと言い出したら

山内:だから、こういうふうにして(不明)・・・

野村:あのね、あのね、もうちょっと紳士的に話しませんか、人様にはね、ね。ちゃ

告 1 4 3 - 3
(告 1 4 2 - 2 の反訳)

んと理路整然としてたね、思い込みだとかね、じゃなくてね、根拠だとかね、事実に基づいてね、論理的に話しをしなければいけないわけですよ、

山内：見してくれるんだったら（不明）・・・

野村：話してる。話してる。でね、そのなかには言い間違えたりすることもありますよ。それはねちゃんと正式に謝ったり撤回したりすることによってね、本筋に戻すことができるもんなんですよ、よくないのは・・・

山内：（不明）

野村：話してる。僕が話してる。よくないのはね、それをダラダラ流してしまうのはよくない。ただ、それが自分にあなたが正にね、それは自分がね、見てなかったとね、第三者委員会から出たものに対してね、見てなかったと。あれはね、紳士的な対応であってね、そういうふうにするべきなんです。僕が撤回してることをね、あたかも 1 回言ってしまったものはね、決して覆らないことであるかのようにね、徹底してやることは、フェアじゃないよ。